

ジオパークと世界遺産

ジオパークとは何か

- 世界遺産の地形、地質版
- 科学的にみて貴重な地形・地質や景観として美しい地形・地質を生かした「大地の公園」
- 地球や自然の歴史を体感できることが重要

文化景観や植生も含む

- ◎「地質公園」とか「世界地質遺産」と訳されることがあるが、対象は地質だけでない。
- ◎地形や、人間の働きかけによって生まれた、棚田や考古・歴史遺跡のような文化景観、
- ◎あるいは特異な地形・地質に上に成立した生態系や植生なども含む幅広い概念
- ◎したがって「大地の公園」、「大地の遺産」、「地球遺産」と訳す方が適切



雲仙の棚田 100選の棚田の1つ

地質が基盤となって生じた植物群落



四国・東赤石山



ジオパーク活動

- 1990年代、ドイツの地質学者が提案
- 2001年、ユネスコの非公式プロジェクトに
- ヨーロッパ、中国が先行

- 日本では日本地質学会が「日本の地質百選」を選ぶなどの活動始める
- 窓口は文部科学省ではなく、経済産業省の産業総合研究所地質部門(旧地質調査所)

2008年5月日本ジオパーク委員会が発足

- ◎ 日本地質学会
- ◎ 日本地理学会
- ◎ 日本火山学会
- ◎ 日本地震学会
- ◎ 日本第四紀学会
- ◎ 国立公園協会
- ◎ 産総研地質調査総合センターなど

といった地球科学に関わる学会、団体の代表や専門家計11人が集まって発足
委員長は尾池和夫前京大総長

世界ジオパーク登録申請に向けての対応を始める

- 2008年は5か所から申請があった
- 糸魚川
- 洞爺・有珠
- 雲仙
- 山陰海岸
- 室戸

このうち上位3か所が国内審査を通過

2009年

- 世界ジオパークネットワークから委員が来て審査(地質学者と地理学者)
- 2009年8月、3か所が世界ジオパークに認められる(世界で63か所)

日本ジオパーク

- 世界ジオパーク3か所の他
- 山陰海岸、室戸
- 阿蘇、隠岐、きょうりゅう渓谷ふくい勝山、天草御所浦

全部で9ヶ所 国立公園と重なるところが多い

その後、増加し、2011年現在、20か所に

2012年

- 伊豆半島
- 箱根
- 銚子
- 八峰・白神(秋田県)
- 湯沢(秋田県)

の5か所を日本ジオパークに認定

ジオパークと世界遺産の違い

世界遺産

優れた自然や文化遺産を人類全体の遺産として保護することが目的

観光地として売り出すことは本来の目的ではない

世界遺産

エジプトのアブシンベル神殿がアスワンハイダムに埋没してしまうので、それを救おうという運動がきっかけ

「危機に陥った遺産」を救おう

「いいものは世界遺産として保存しよう」に変化



ジオパーク

地形・地質や特異な生態系などを保全するとともに、それを研究や教育に生かし、さらにはツーリズムを通じて地域の持続的な発展に寄与することが目的

さらに

- 単に優れた自然があるだけではだめ
- 地域の地形・地質や生態などについて解説できる科学者が必要
- 世界遺産は成因についての詳しい説明は要求しない
- 地球で唯一の「素晴らしい」もの
自然美、地形・地質、生態系、種の多様性
- 地域独自のもの、個性的なものを優先

ジオパークに必要なこと

- 自然観察路の整備や適切な案内板の設置
- ガイドブックの出版
- ガイド付きのジオツアーの実施
- 博物館などの施設
- ガイドの養成や全体の運営を行う組織
- 地場産業などによる地域振興

糸魚川ジオパークの場合

- フォッサマグナ博物館
 - 青海自然史博物館
 - そこに学芸員が3人
 - ジオパーク推進室
-
- 日本ジオパーク推進協議会
(会長 糸魚川市長)



フォッサマグナ博物館

青海自然史博物館



糸魚川ジオパーク

実にたくさんのジオサイトを擁する

- ヒスイ峡
- 親不知
- 弁天島
- フォッサマグナの断層
- 塩の道
- 月不見池(地滑り地)
- 不動滝
- マイコミ平
- 梶海新道(親不知から朝日岳、白馬岳まで)
- 雨飾山、海谷溪谷、焼山など













評価された点

- 日本最古の地質からヒスイ峡、フォッサマグナ、マイコミ平、さらには北アルプスの氷河地形や高山植物の群落まで、長い自然の歴史を示す多彩なジオサイトの存在
- 2つの博物館を始めとする広範な活動

日本列島はジオパーク候補の宝庫

- 複雑な地質
 - 隆起しつつあり、侵食の激しい山地
 - 活発な火山活動
 - 海に囲まれ、南北に長くのびる島国
- といった自然の特性を反映して
- 高山、火山、海岸、島、河川を中心に素晴らしい自然景観が目白押し



石廊崎





















災害ジオパークも



青嶺山北側遺跡（感興カルデラ）

1868年（明治元年）青嶺山の噴火によりこの遺跡が埋没し、東西2km、南北2kmのひし形カルデラができた。